

平成27年度第2回千葉市総合教育会議議事録

- 1 日 時 平成27年12月24日(木) 午前10時30分～午前12時00分
- 2 場 所 第一会議室
- 3 出席者 市長、中野教育委員長、内山委員、和田委員、明石委員、小西委員、志村教育長

4 議題

(1) 大綱案について

- 森教育次長 資料1、2、3を用いて説明
- 川上総合政策局長 資料4を用いて説明
- 明石委員 1点目は、千葉市の教育の大綱の6つのポイントはよくできている。一番気に入ったのは4番目のまちづくりはひとづくりであり、ひとづくりは教育であるというところであり、ここは本気でやっていかなければいけない。また最後のところの、全ての人々とまちづくり、人づくりをすすめていくというところもよく、この2点をキャッチアップしていただきたい。
- 2点目として、重点的に取り組む項目の2番目で、地域社会全体で子どもの成長に取り組むというところはいいのだけれども、学校支援地域本部の設置と記載されているが、月曜日の中教審の答申では、地域学校協働本部と変えている。これからは協働、パートナーシップということが大事になってくる。学校支援地域本部を否定するわけではないが、制度発展的な地域学校協働本部がある。地域で支えて、親も子どもも学習、学んで育っていくという形で、学校観を大転換していく。文言には注意していただければ。
- 内山委員 オリμπック・パラリンピックのことが書いてあるが、子どもたちはまだ関心がないのではないかと思う。
- 市長 まだ現時点ではそんなに強くないだろう。今年度、何回かアスリートの方々に学校に来ていただいた。アスリートに触れた子供たちは確実にオリμπック・パラリンピックを身近に感じたと思う。オリμπック・パラリンピックまでにできる限り障害者アスリートに触れる機会を作っていき、身近なものとして準備していく。さらに言えば、健常者の方々も障害者スポーツをやる時代であり、競技者数を増やしていくことが大事である。
- 和田委員 先日、運動能力のアンケートの回答の中に、小学校5年生はオリパラの関心度が全国平均に比べてかなり高かったが、中学2年生は全国平均に比べて少し高い程度だった。中学生はボランティアとしても手伝ってもらえる時期なので、この世代に対する啓発活動をしていかなければいけない。
- 市長 そのとおりである。中学生の子どもたちは5年後一番いい時期。2020年のボランティアの話だけではなくて、今から2020年に向けて、いろんな体験をしていってもらわないといけない。
- 明石委員 人権の花という取り組みがあり、球根を取って、次の小学校に持っていくというもの。パラリンピックもリレー方式に伝えていくと浸透するのではないか。まだ多くの小中

学生は知らない状況であるので、シンボルを作ればいい。

市長

そのとおり。連携したり、横のつながりを感じらるようなスキームを考えなければいけない。

志村教育長

車いすバスケットは具体的な観戦の機会があったので、子どもたちが知る機会ができたと思う。リアルという漫画を中学生が読みながら、そういう子たちが現実に一生懸命練習してバスケットをやっているんだというのがわかった。これから広げていきたい。

各都市で大綱が出されているが、見たところ、各都市の特徴が出ているものは少ない、千葉市の大綱は千葉市色に塗っていかないと意味がないのかなと思う。

大綱と協議題がどのような関連があるのか皆で考えておかないと、大綱は大綱、協議題は協議題になってしまう。

3つの協議題は、現在、過去、未来だと僕は捉えている。まず郷土教育というのは、誇りを持つという点で重要である。今を生きるというのは、子どもたちを安心して育てていく、それは教育委員会の中で、現在やっていかなければいけないことだと思う。これを通じて、千葉市に魅力を感じてくれる方々が増えていく。また子どもたちが千葉市を支えてくれる人材育成につながっていく。これらを踏まえると、古を知って、今を生きて、未来を創っていくという形で、協議題のテーマを大綱にうまく位置付けられるのではないかと思う。

市長

志村教育長の思いが良くわかった。大事なことは現実に即することだと思う。教育の話は、こうあってほしい、こうあるべきだと主観が色濃く反映されがちだが、そうではなくて、例えば、今を生きるという話でも、実際に子どもたちが置かれている現実を直視したうえで、どう対応していくのかという話だと思うし、キャリア教育にしても、現実に就労の場においてどういう雇用のギャップが起きていて、さらに将来的に考えた場合、どの仕事がなくなっていくのか、現実的に将来を見ていって、今何を教えるのかということだと思う。

過去の話も、現実にこのまちに歩みとしてあったことだから、それを学んでいくことが実態に即し地に足を着いた教育をするうえで大事だと思う。

古今未来というのは、最終的にはリアリティあるものをするうえで重要だと思う。教育行政は理想のものが多く、その前に現実的な話が重要、現実をちゃんと見なければいけない。

明石委員

よく市長がおっしゃるけども、日本の場合、進学指導がキャリア教育になっている。教員は、22歳で教師になると、教員しか知らない。非常にまじめで前向きなんだけど、職業的な多様性をわからない人にキャリア教育はできない。理念は分かるけど、現実的には難しい。市長にお願いしたいのは、教員の方々に、教材研究もいいけども、いろいろな職場体験、海外体験させてほしい。そうでないと難しい。

市長

おっしゃる通り、教員の研修の一環の中で、我々のこの考え方を踏まえた研修プログラムを意識しなければいけないかもしれない。現在は社会人で民間で働いている人間も10年たつと世界が様変わりしているような状況ですから、そういう意味では、教員の皆さんが社会でいったい何が起きているのか、社会の変化を、何かリアリティを持ってわかるような研修プログラムを意識していくのが必要だと思う。

明石委員

一般企業等でもいいが、市役所の市民課の窓口でやると面白い。教員も体験すると、

変わってくる。そういうチャンスをお願いしたい。

(2) 平成27年度に協議・調整を進める連携事項について

森教育次長・ 資料5を用いて説明

川上総合政策局長

中野委員長

課題は多いが、放課後子ども教室の地域主体のプログラムについて、地域とのつながりということを大事にして、ご検討いただきたい。

市長

確かに、地域主体のプログラム、我々も今の数でいいと思っていないので、拡充したいと思う。資料に、「新」、「新」と書いてある一方で既存事業の部分に「拡充」としか書いていないから、そういう風に考えられたと思うが、我々は地域主体のプログラムを核としてなければいけないと考えている。ただしその核が、コーディネーターの方にあまりにも依存しすぎているという状況を何とかしなければいけないという中で、教育委員会の中に総合コーディネーターの用意をして、支援をしていくという考え方。まずは地域主体のプログラムというのがコアであるということは間違いない。大学や企業によるプログラムというのもどちらかというと地域主体のプログラムに近い。市内の、つまり地元の企業の方々が、ある種自分たちの子どもをボランティア精神の中で育てていただく。大学や専門学校も同様に、専門知識を活かした中で地域に貢献するということが、基本的なコアであることは間違いない。

和田委員

今の話に関連して、新しいプログラムはおそらく新鮮で魅力的で、楽しそうに子供たちにとっても保護者にとっても思えて、既存のプログラムに行く子が減ってきて、新しいプログラムに行く子が増えてくると思う。そうするとせっかく今まで地域と学校のつながりがあり、学校の核としてやってきた地域の方々が、端的に言うと面白くなくなってしまうことが起きてしまうのではないか。

市長

それはコマ割りの工夫ではないか。曜日や時間はいっぱいあるので、対象となる人が重ならないようにコマ割りをすればいいのではないか。今でも十分空いている。

和田委員

毎日ということを想定していればそうだが、かなりきめ細かくやっていかないとだんだんそちらの方に流れていってしまって、全体的な流れが、そちらの方が楽しいじゃないか、そちらの方が楽しいか、それでいいじゃないかとなってしまうと、せっかくできてきた学校と地域のつながりとか、ボランティアの方々のモチベーションとか、地域の団体の方々が学校を見守っていこうという意識が薄れてしまう。せっかく学校を核とした地域づくりというものが薄れていってしまうのではないかということが不安だ。

今までのものとこれからのものがWINWINで発展していくことが一番いいと思う。地域主体のプログラムが核であるということを明確に打ち出したり、ネーミングを変えるなど、地域の方々がやっていくものと、総合コーディネーターがやっていくものや企業が入るものを明らかにちがうものとして、両方とも皆さんのためにやっていくとすることが必要ではないか。

市長

全体整理はうまくやったほうが良いとは思いますが、放課後に学びの機会を作ることが主眼なので、バリエーションがあること自体はよいのではないかと。

小西委員

先日磯辺小学校の放課後子ども教室を見学して、和田委員と同じような意見をもった。コーディネーターから、最初始めるのに、講師を探すときに学区全部の家にポスティングをしたり、保護者の方とか学校の先生とかボランティアの方とかの話を何度

も会議を開いてすり合わせて、今の放課後子ども教室があるということを伺った。それまでに積み上げてきたものが新しいものが入ってきてやる気をそいでしまうのであれば、かなり慎重に進めないといけないと思う。

磯辺小学校に見に行ったときに、子どもたちはいろんなプログラムがあってすごく楽しそうにやっているし、ボランティアの方々和孩子たちの距離感がいいなと思った。子供たちが自由に過ごしている中で、ボランティアの方々でしゃばりすぎず、子どもたちがやらされているわけではないというやんわりとした雰囲気の中で過ごす居心地の良さが大切なことではないかなと感じた。新しいプログラムをやることはすごくいいことだと思うが、子どもたちが自分たちで思い思いの好きなことができる時間、これを大事にしていけないといけないのかなと思う。

市長

おそらく一番いいところに視察に行かれたのだろうが、それを前提に全部考えてはいけないと思う。そういう恵まれた地域と子供がいる一方で、正直言ってかなり厳しい地域が大半である。その大半がこのままでよいと思っていないし、それをできるところみたいにやれと地域に言うのは無理だと思う。すごくいい学校でも、コーディネーターが退いた瞬間に全部なくなってしまったというのをいっぱい私たちは見てきた。いい地域は今のベースにちょっと付け加えるだけでよい。そうではない学校が大半の状況の中で、放課後子ども教室を教育委員会も充実させていきたい。いろんな支援をしてきたけども今の現状があり、そうした中で、僕らが、組織的に全校で充実させていくために何をしなければいけないのか議論してきたことが背景にあるってことをぜひご理解いただきたい。稲毛とか磯辺とかうまくいっているところをいじりたいという話ではない。

和田委員

ボランティアに頼るのは無理だというのは十分承知している。ただボランティアを育てることもあきらめてはいけないと思う。

市長

もちろんである。

和田委員

放課後子ども教室は、子どもたちのためというのは第一義的にはあるが、地域づくりにも一役買っているというのも間違いはない。放課後子ども教室に予算をつけていくのであれば、その中の一部でボランティアを育てていく、新しいボランティアを発掘していくという配慮もお願いしたい。

市長

そのための総合コーディネーターである。まずお考えいただきたいのは、総合コーディネーターがいなかったということである。全部コーディネーター任せで、支援が何もなかったのが問題で、このような状況になっている。だから教育委員会の中で総合コーディネーターという形でコーディネーターそのものを支援し、組織的に育成していくということ。その間の時間をかけた議論がある。

明石委員

非常にこれは賛成である。中教審の答申の中で、統括コーディネーターというものが記載されている。統括コーディネーターが全体設計図を書いて、コーディネーターがいて、そのコーディネーターがボランティアを育成するっていう仕組み。来年度からまさにこのプランが実行できる。千葉市では総合としているが、文科省では統括としている。

内山委員

地域コーディネーターに関する課題を早く見つけてちゃんと据えつけて、そして全体を動かしていくことは良い。今私が地域にいるが、学校の校長先生と話をしても、なかなか動きにならない。組織的な支援がないと、動かない。

和田委員

今の話とは別な放課後子ども教室の話だが、運動能力に関する調査結果について、千葉市は非常に良く、全国と比べてもほとんどの種目で上回っているが、事務局に聞いたところ、二極化が非常に進んでいて、運動能力の高い子と、まったく興味がなくて体を動かすのもしんどいという子もいる。放課後子ども教室で安全面を考えると教室の中ということが多くなるとは思うが、今後のプログラム、企業とかが提供する中で、体を動かすというものも積極的に取り入れて、簡単な運動でもいいからちょっと体を動かすものを地域コーディネーターに求めて入れたほうが良い。

市長

そのとおりだ。これは室内だけを想定しているわけではない。校庭とか体育館があるのだから、ちゃんと指導ができる人が入ってくればいくらでもできる。そこに我々は期待している。

こういう話は、実際に事業として成り立たないと無理だ。地元の教えられる人とかを発掘して、事業としてある程度やっていけるところに我々としては入っていただきたいと思っている。ボランティアが人を探してコーディネートするという形は、あればそれが一番最高だが、それは普通はできない。ビジネスとしてというよりも、最低限事業として永続性があるかたちで、地元の教えられる人たちを発掘していただくという考え方。民間事業者に任せたからって、いきなり東京から人が来るという話ではない。

明石委員

最後の郷土教育のなかで、データが一番興味あるが、サンプルはどれくらいか？サンプル数を入れていただきたい。

※WEBモニター回答：3，274人うち市内：1，126人、市外：2，148人
「とてもそう思う」「ややそう思う」の回答の合計（事務局追記）

何を思ったかという、好感度、来訪意向少ないというけども、千葉氏だけでも37%も行ってみたいと言っている。これは相当いい資源だ。こういうデータを出してほしい。そして学校の先生も行ってほしい。関東圏で、これだけ知っているというのはかなり可能性がある。

また具体的なプランが点になっているのを線と面にしてほしい。例えば千葉常胤は長生きしている。どんなご飯を食べたかを調べてもらって鎌倉時代の食生活を広めていく。縄文時代も健康だと思うので、縄文食はいいですよと、広めていく。キャラクターを活用しながら、千葉市は健康教育でナンバーワンになるんだぐらいの大きな旗印があって、ストーリーがないと断片的になりやすい。

できればかそり一ぬやちはなちゃんをいろんな場面で使っていただきたい。例えば、高校生のインターハイと国体の種目の紹介を全部チーバくんで行った。パラリンピックの紹介もちなちゃんとかそり一ぬくんで紹介したらどうか。せっかくいいキャラクターなんだから、いろいろなイベントの紹介をこの二人でやっってもらいと盛り上がってくる。

市長

ありがとうございます。点じゃなくてつなげるっていうのは議会からも意見をもらっているし、食の話も実際に鎌倉時代に何を食べていたのか研究されたり復元されたりしている。そういうのをうまく使っていくとか。

何よりキャラクターの使用も教育委員会とか都市局で閉じてしまいかせずに、もっと浸透させるために手法を考える。

中野委員長

千葉常胤がいなければ鎌倉幕府ができなかったというくらい重要な人物だが、知名度

が低い。一般的な知名度を上げる必要があると思う。親子三代夏祭りのときに武者行列をつくるとかはどうか。

また開府900年に合わせて、NHKの大河ドラマに推薦するのはどうか。

千葉以外の地区での頼朝の武者行列で千葉常胤がどういう位置にいるのかわからないが、広く子どもたちにも知らしめるなんらかの方法があると良い。

市長

ありがとうございます。親子三代での武者行列、話としては出ている。どういう形でやるのかという話はあるが、わかりやすいもので何からの形でやっていきたい。

頼朝の関係については、鎌倉市だけでなく、全国、首都圏で連携してイベントなどをやっている。ずっと千葉市は入っていなかったが、これからは鎌倉とか鋸南であったり、源平関係のイベントをやっているところとの連携をしながら千葉氏をPRしていくことが大事。連携を意識していかなければいけない。

和田委員

中央図書館と文化財課の共同展示、「千葉市の礎を築いた一族 頼朝に父とよばれた男 千葉常胤」とあるが、「頼朝に父とよばれた男 千葉常胤」というキャッチフレーズがすごくいい。頼朝の上を言っている感じがしていい。短い言葉で象徴するものがないと浸透していかないの、常胤はこれもらい、千葉氏についても何かフレーズとして浸透させていくことが大事。

市長

ありがとうございます。そういう形で進めていきたい。

志村教育長

親子三代での武者行列は夏の暑さの中ではいかがなものか。

市長

今議論しているのは、武者行列は正装ではないということ。鎌倉時代の千葉常胤ぐらいのランクの武将は、武将の衣冠束帯の姿で馬に乗っていた、これが正装だからむしろこれで行くべきだという話。武者行列ではない方が戦国時代との違う見た目にもなる。そんな形で議論している

内山委員

先日、公民館活動のフォーラムがあり、参加した。その時思ったのは一つは公民館長の役割、もう一つは活動の実態。

例えば星久喜公民館では、お泊りイン星久喜と言って、公民館に一泊して活動する。もう一つはおゆみ野公民館で子どもの居場所づくりということで、子どもが自由に入れて勉強できて、遊べてということをやっていた、こういった事例を広く知らせたい。また館長は地域と触れ合って、もっとコーディネート的な役割をしていただいてもいいと思う。

市長

おっしゃるとおり。地域にどれだけ入って溶け込んで活動できるかっていうのは属人的な能力もかなり必要になるということと、属人的になりすぎない組織的なやり方、どちらも必要かなって思う。

和田委員

キャリア教育に関して話が出ていないので、少しさせていただく。今までキャリア教育というと職場体験ということで、体験というのは外から眺めているようなお客様のような感じが強くなってしまふ、それが問題だと思う。前回の子ども議会の時に、中学生と意見交換会をした際、どんな資格を取ればどんな仕事に就けるのか、どんな職業につくためには具体的に何をするのかという鋭い質問があった。以前13歳のハローワークという村上龍さんがお書きになった本が話題になったが、あれは理科系の職業とかモノ作りが少ないという話なので、千葉市版の13歳のハローワークを作って、千葉市で必要とされているような職業を列挙して、それになるためにはこんなことをした方が良いんだということを子どもたちに伝えていった方が良いのではない

か。

市長 たしかに、具体的になる。私たちも市の産業状況はよくわかるので、教育委員会と連携して何か議論したいなと思う。よく話を聞くのは、子どもの頃はこれをやってみたいといっぱい思いつくが、もしやるとすれば、子どもの時に何をすべきなのと言ってくれた大人がどれくらいいたのかということ。ビジョンが見えたほうがリアリティが違ふ。その辺の情報と案内がしっかりとできるようにしなければいけない。

和田委員 幼稚園、小学校、中学校何らかの形で働きかけていくことが重要だ。

市長 そのとおり。

中野委員長 その仕事に就くためには何をしたらいいのかなかなかわからないことが多い。未来の科学者育成プログラムで、医療職について話をする機会をいただいた。医師と言ってもいろいろあり、臨床医のみでなくまったく別ないろんな道がある。話を聞いて目指してみようかなという子どもさんがいればと思ってお話をした。
ある程度先が見えるように、そこにいけばその仕事についてある程度わかるという場所があればいいなと思う。

市長 千葉県、千葉県周辺でここに行くといいですよみたいなどころがあるとよい。
弁護士になりたいっていたときに、県弁護士会でやっているこれがあるから何月～何月まで行ってごらんとか、ここの弁護士事務所は行っていいことになっているから行ってごらんっていうのは良いと思う。

小西委員 私は船橋市の小学校とかに弁護士の仕事などの講演に行っている。外部の専門家を呼ぶというのもキャリア教育のひとつになると思う。

先ほどの明石委員のおっしゃっていた意見について、私も賛成で、教育委員になって、学校の先生ってこんなに忙しいのかと思った。授業や部活だけでなく、公開研究会のために残業していたり、さらにキャリア教育のための勉強をするとすると、各自に任せておいてはかなり難しい。そこは教育委員会や教育センターの方で研修としてフォローしていかないといけないと思う。

市長 そのとおりだと思う。

5 その他

(1) 千葉県「人口ビジョン」素案(概要)、千葉県まち・ひと・しごと創生「総合戦略」素案(概要)
稲生総合政策部長 資料6の概要を説明

終了(12:00)